

本書の諸所に書かれた漢字、即ち前述の如く漢譯の俱舍論や、安慧のその釋中から引いた漢字は、誰にも認めらるゝ通り、原本中の緊要な文句でもなく、また抽出に一定の方針を以てしたものでもなく、時には一句が記され、時には單に數語、もしくは一語のみの記されて居ることもある。さうして特種の場合を除く外は、一樣に此等の語句は、直にその下に譯出されて居るのが常である。

然るに以上述べた體裁は、獨り殘存の第一卷(001)に於て認めらるゝ所であつて、他の殘卷は不思議にも體裁を異にしてゐる。即ち第四卷(002)に於ては、本頌や長行は譯出されず、唯釋の部分だけが譯述せられ、その切れ目に當る所に、「釋曰」の漢字が記されてある。この切れ目は即ち長行の句節に對する釋の切れ目であつて、一句節を釋し了りて、更に次の句節に移る所に、此の二字が記されて居るものである。

Ch. XIX, 001^aは各々「今此以後說相應義」の漢文を首に記した三篇であるが、内容は互に相異り、一部分の外は一致しない。第二篇の末には第九項に譯出した識語があつて、自分の譯にしてもし正鵠を誤らないとすれば、少くとも此の一篇はチュケル・テミユルといふ人の拔萃したものである。何から拔萃したものであるか、まだその出所を検し得ないが、かく同様に「今此以後說相應義」と題して、然も内容の相異つた三篇が、同一實義疏の原本に存したと見る事は困難であらう。多分此等の三篇は、ある佛典中の相應の義を説いた所を引いて來て譯出し、こゝに書き加へたものであらう。然も之が前述の如く、漢譯俱舍論第四卷に存する相應の義に應ずる釋の性質を有するものであることは、ほとん疑無いであらう。第三篇の終には、「觀音經 sutur nūṅ (經の) 相應是」なりと見えて居る。